

京鹿子

平成三十一年一月一日発行
通巻二三三号(毎月一回一日発行)

1月号

京鹿子祭特集号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その 四 十

風 音 や ひ ら が な 紡 ぐ 木 の 葉 雨

梢^{うれ} の 葉 の さ し も 知 ら じ な 神 無 月

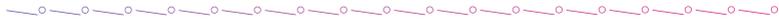
神 無 月 上 枝 に か か る 雲 ひ と つ

一 枚 の 木 の 葉 の 本 志 天 へ 向 く

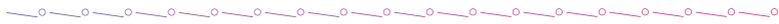
星 屑 の こ ぼ る 大 河 よ 山 眠 る

迎^あ 合^ど に な る 小 春 の 猫 の 有 頂 天





中庸の空に染まらず寒の木瓜
白さざんくわ昨夜のいざこざ引き摺らず
ぶつ切るは安と康の字鮫鰯鍋
毛糸編む夫のその気の不思議かな
との曇る空も小春やおかめ塚
お多福の百相の面小春寺
お百度の子授け地蔵冬うらら
葬る地の枯葉の遊すざびゑんま堂



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

秘 仏

西 陣 や 秘 仏 の 叫 び 銀 杏 枯 る

ふ た つ 影 一 会 を 満 た す ぶ ぐ 料 理

日 記 買 ふ 電 光 ニ ユ ー ス 時 流 す

— 追 懐 —

棒 読 み の 独 語 を 流 す 冬 の 川
〔平成十三年作〕

裸 木 と な り 迂 闊 に も 鳥 ね む る
〔平成十三年作〕



—近詠—

和田 照海

冬の蠅

蛸壺に昼の闇溜め冬の蠅

日和見といふ綿虫の裏鬼門

崩れ築日毎に水の堅き音

無住寺の魚鼓ささくれて冬ぬくし

錦句碑建立秋の中の点景句碑除幕



松本 鷹根



初時雨

学校は唱歌の時間小鳥来る

歳月を仰ぐ塔空系露の忌

近江富士嶺を丸めて冬に入る

四、五百羽鴨を浮かせて御堂霽れ

北山の稜線糺す初時雨

近 詠

塩貝 朱千

中也の詩

ひとすぢの日矢を残して秋夕焼

秋深し華の菩薩に一字三礼

花終ほろほろ咲けば中也の詩

初時雨まつ毛に重し驢馬がゆく

冬落暉引き際殊にすがすがし

英華採集

終列車の尾灯虫の闇残し

大 阪 本 郷 公 子

窓外に通り返り過ぎて行く終列車を眺めている作者の脳裏に掠めるのは、遠き日の思い出であろうか。先程までは耳に心地よい虫の音を聴きながら二人で過ごして来た歳月に想いを馳せていたに違いないが、今は、その虫の音も軋むレールの音に消されていく。瞬時、目を閉じていた作者の目は淡く霞んで遠ざかる終列車の尾灯を追いかけている。消え残る尾灯の残像に虫の音が再び甦る。下五の「虫の闇残し」には、秋の夜の寂しさを胸に抱いている作者の思いを的確に物語っていると言える。

高きに登る鳥は復唱怠らず

月ヶ瀬 上久保 節 子

季語「高きに登る（登高）」は中国の故俗から来ており陰曆九月九日の重陽の日に行われる行事に由来する。茱萸の実を菊酒に浸して飲むと災厄が払われ不老長寿がもたらされるとされる。どこからともなく聞こえて来る鳥の囀りに何時もと違うものを感じた作者の胸に去来したものは、この故事であろう。茱萸の実をいただいた鳥が、その御礼とばかりに囀りを繰り返す。「復唱怠らず」の確かな断定に、その思いが伝わってくる。また、山へ登る者への安全を願う警告の意もあるだろう。

ゆきあひの風に乗りつぐ秋の蝶

福 山 古 本 も ね

夏の終わりから秋へと変わろうとする頃、雲の容（かたち）も二つの季節のものが闘ぎ合う。同時に風もまた自ずとそれぞれの形を作り出すのが、「ゆきあひ」の言葉の意味である。折しも、夏の蝶も秋の蝶へと変化していくことになる。蝶自身が、自然の摂理の赴くままに己を自覚していく。上五中七の十二音は、その様を十二分に表出しているものである。作者独自の表現を発見して佳句へと成さしめた。

神麓集

実南天 藤岡紫水

月夜 丸井巴水

木枯しの音生まれくる闇の音
生活たつきの灯とどき大根夜も太る
失せものの出ぬいらだちや暮れ早し
禅五山由々しく冬を構へけり
白壁に影遊ばせて実南天

縮まらぬ恋路を濡らす月明かり
毒の実も枯れ山彦のかすれ声
枯葦をすすりなかせて消ゆる風
待たすより待つ欄干はすでに冷ゆ
白壁にこくりと影を折る月夜

初夢 沼田巴字

望の月 植村蘇星

初明り阿弥陀の姿ほのと浮く
初日の出音といふ音静まりて
この道はいつか来た道初山河
初夢やくるみを一箇賜はりぬ
一生の名残幾つや冬夕焼

木下闇抜けて奥院懐へ
身に入むや心の透き間払拭す
豪快に笑ふ幼児竹の春
五七五に宿る詩魂や望の月
合点の餅合点秋高し

神麓集

帰心の灯 北川孝子

せかるるもゆとりも少し神無月
直感のときに危ふし木の葉散る
夕映えの雲に明暗神無月
北へ向く鳥ありありと冬ざる
神無月電車帰心の灯を詰めて

コスモス 直江裕子

コスモスの微熱空間漂へる
良い月が出てゐるそろそろ許さうか
月に石きつと象にも土踏まず
柚子したたらす君が居たはずの時間
ががんぼの見えない糸を曳いてをり

握り飯 高木晶子

台風過良くも悪くも握り飯
梨一つ食べて明日もひとり者
秋雨前線動かず二円切手足す
実むらさき色控へ目に御所の内
繕はぬ屋根の上なる無月かな

冬隣り 伊藤希眸

いつの間にか還りごころを萩月夜
一滴の命の秋蚊筆洗ふ
霜月の山鳴りを聞く麓に灯
天空のホテルの窓を小夜時雨
野太き声川越えてくる冬隣り

神麓集

外回り線

井上菜摘子

ジオラマの外回り線黄葉す
こすもすに棲みいちちを行方不明
冗談にしないで通草裂けてゐる
白曼殊沙華ははの踵のよぎりけり
榎植落つピアノのどこにもない音色

姫胡桃

村田あを衣

姫胡桃割ればたちまち人見知り
神の留守神馬は雲に乗りにつけり
おほらかな壺はかげらず月今宵
ふる里へ今なら翔てる秋の蝶
起上り小法師を試す神無月



京鹿子大賞受賞作品

京都市

菊池 和子

柿の花くくつと笑ふ児の出臍

句読点打ち違ひして雨月かな

くもの囀のさやかにゆらす裏鬼門

あやふやな身のおきどころ芋の露

滴りやごくりと少年変声期

ことば一つ捨て中秋の月ひらふ

次の風来れば鷺草翔つつもり

花葛や風に聴きたき明日のこと

朝顔の大きなロマン蒼天へ

万葉のつばさとなりぬ龍田姫

接続詞の隙間に生まる流れ星

忘却は生きて行く術鳥渡る

初秋やふくらんでくるカプチーノ

ふたごころ秘めてゐるかも淡紅葉

前を見るゆるき晩年とろろ汁

茶の花や一筆箋の置き手紙

初蕪漬けてこの世をまるく住む

笹鳴や茶柱といふ験かつぎ

草萌ゆるかたり尽せぬ森の詩

目薬や刹那おぼろの中にゐて

山河には山河の定め葉喰

笹鳴や谷水細く手を淨む

鳥帰る乗換へキップ風に乗せ

逃げ水を追ひ追ひ行けば石となる

前略やポンと産まれた露の臺

落し角これより王者の道歩む

ふる里をしのぶ高さに桐咲いて

止まらない思ひ出話し竹の秋

石けりの石の小さし山の蟻

沙羅双樹うしろより来る花の夕

京鹿子大賞受賞作品

高槻市

安田 優歌

手の平も眼も言葉濃紫陽花

柿すだれ夕日留むる郷の空

浮世絵や色好みせし紙魚のあと

ポソ・ポソと爺じの散歩赤とんぼ

噴水のはたと止んでの二楽章

芒すすき駆ける少年風となる

まつさらなみどり児の手や初夏つかむ

あやとりの梯のゆくへ芒の野

湖昏れて黒き画布なりカンナ燃ゆ

微笑んで花野の妣の跳んでくる

核の世や私はかぼちやであるがいい

水音のよろづに敏き無月かな

信州の便りほろほろ栗きんとん

花菜陽炎ふはり浮きくる一輪車

秋刀魚食ぶ骨の容もさんまかな

病む夫へ春をひもとくオルゴール

省略のきかぬ面々日向ぼこ

落花枝に戻らざる世の渦まきて

夫病みて柱の黙と除夜を聴く

ゆらゆらと船が空航く花霞

千体佛の微光微笑や初明り

カステラの薄紙の黙夕ざくら

はなびらの小さき呼吸寒牡丹

米寿なる鼓の韻や花の雲

寒の水ごくんと吞めば火の匂ひ

衣更ふ終章へ襟正しけり

あをによし野梅に酔へり野の佛

自画像に着せるむらさき衣更へ

寒茜両手に抱けば血の滾る

春雷や一角獣の角のびる

花 洛 賞

福山支部

石原 孝人

鶯や切株に置く旅かばん
春愁の切り取り線の切れぬまま
夏富士は雨の彼方や三保の浜
新緑や鏡の中を抜ける風
青潮の引き残したる波の音
万緑や一刀彫りの龍のひげ

陶工の五臓で読む火七変化
蜘蛛の囲の一番星をとらへをり
鳩浮巢入日の湖の句読点
虚と実を一景にして床もみぢ
冬銀河窯の色濃き音を聴く
緋襷は藁の化身や冬の虹
しぐるるや戦始まる登り窯
余生には未知なる余白日記買ふ
一湾の落暉巻き上げ鷹柱

青 秀 賞

福山支部

平田 初音

小流れの調べ野にあり涅槃寺
補聴器のはや春風を捕へけり
風光る浦^{うら}曲^まを統べる鳶の舞
白桃や傷つき易き反抗期
縄電車春泥に來てまはれ右
甚平や何か為さねば老い易し

残り火は夫のぬくもり魂逆り
まだ空の高さを知らず今年竹
籐寝椅子てふ放心の置きどころ
幸せは積み上げし些事日日草
地の底のマグマ抜きをり蟬の穴
赤とんぼ風の段差に躓きぬ
単調を寂と設ふ鹿威
太郎冠者の笑ひ声する石榴の実
実をつけてより鶉の木となりぬ

募集 大作賞
習志野市 上野紫泉

椅子ひとつ

椅子ひとつまた語りだす白ふくろふ
貝殻は寒九の雨を溜めてをり
冬桜 仄かに点る蔵の窓
白鳥の飛び立つ先の青さかな
朧夜の浮力つきたる二重橋
にわたづみ流れとなりて桜屑

古雛しまふ潮路へ帰へさむと
万緑を容れて姿見耀ひぬ
梧桐のさけめ萌えくる久遠かな
揚花火昭和どすむと降りにけり
晩夏光コトコト走る一輛車
潮騒や砂山崩る流星群
白秋や天井絵より龍吼ゆる
一本のペン奔りだす終戦日
出会ふまでゆつくり黄落踏んでゆく



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

胡桃村騒がせ風の又三郎

嘯み合はぬ会話身に沁む夜の電話

會津武士眠らせ蕎麦の花月夜

余生また地凶の無き旅霧迅し

露草のひかり集めて詩集とす

胡桃割れしかめつ面を返上す

身に入むや百から引いてゆく七つ

かくれんぼの鬼の分身赤蜻蛉

厄介はやつかいとて萩括る

神の旅番外にゐて奉る

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

あけび裂け謀反の目覚めかも知れず 城陽 鷺山 珀眉

草の絮決めかねてゐる途中下車

落花生どのアングルも私かな

自愛てふ一喜一憂もず日和

短日の小半時とや一句成す

鯉飛んで海に溶けこむ木曾の水

小鳥来て日時計の刻乱しけり

余生なほ照る日くもる日秋海棠

シャンパンの泡の行方や星月夜

往きちがひ多き会話や長十郎

京都 片山 熙子

獺祭忌熟し切れない文語体

福 山 亀井 福恵

密に疎にどれも爆笑曼珠沙華

海原や台風の目の思案中
神話めく大和の風や秋興る

新涼や畏みて受くるルルド水

ゆきあひの風に乗りつく秋の蝶

福 山 古本 もね

穴惑この世に置きし後髪

あたたかしポストの口よ敬老日

蟻螂に斧と炯眼ありにけり

岩を咬む白きたてがみ台風来

新米の一つぶ掬ふ重さかな

福 知 山 西村 滋子

風呂敷に迷ひを包む思ひ草

子沢山朝の食卓葡萄盛る

アリゾナ 伊吹 之博

手の平の胡桃を振れば山の音

秋便り知人の撮りし自己写真

ひと言のじわり身に入む齡かな

ダウンタウンジャズ流れ出す星月夜

かまつかの暮れゆく中の車椅子

動物園鶴亀同居の檻の中

酒 田 藤波 松山



終列車の尾灯虫の闇残し

大 阪 本郷 公子

手に享くる延命水へ月しづく

検尿は無理して少々酷暑かな

さいたま 神田 惣介

短冊ゆれ今日宮萩の晴れ舞台

古都の秋人氣なき墓地父母の声

戸 田 遠山 悟史

萩盛ん小谷の里の保育園

朝まだき松茸たちの舞踏会

高きに登る鳥は復唱怠らず

月ヶ瀬 上久保節子

手の甲の皺また増えて走り蕎麦

山の辺の故事の始まり曼珠沙華

若き日の一枚のフォト秋夕焼